民俗学

# ６．とむらう－葬送－

菊地暁（folklore.lecture@gmail.com）

①原論：「社会的事実」としての死

・グリーフ（grief）／死者と生者、生者と生者の関係の（再）構築／グリーフ・ケアとしての葬送儀礼

②前近代：葬送儀礼の「かわりにくさ」

＊葬式

・死の直後の作法（タマヨバイ、フレ、枕飯、湯棺…）

・通夜と葬儀（参列者の範囲と役割）

・野辺送りと埋葬（土葬、火葬…）

＊墓制

・両墓制（埋め墓と詣り墓）：「固有信仰」の残存 or「仏教土着」の証左

＊供養

・過去帳、位牌、遺影、仏壇

・お盆、お彼岸

・年忌供養、改葬、洗骨、弔い上げ

＊タマシイの行方（山上他界 or 地下他界）→非・仏教的他界観

＊異常死の葬送：未婚者の「ムサカリ絵馬」、妊産婦の「流れ灌頂」

③近代：「無名戦士の墓」（by B·Anderson）をめぐって

・京都招魂社：戊辰戦争の官軍側戦死者の祭祀→靖国神社（1869 東京招魂社）

・「英霊」という名称の一般化日清戦争（1 万 4 千人）→日露戦争（8 万 8 千人）

・神道指令（1945）による政教分離→講和条約締結（1951）後のあいまいな復活

④現在：自分でデザインしなければならない「葬送」に

・高度成長期：出郷者たちの葬送（脱・地域共同体化→斎場葬化＝商業化、均質化）

・バブル崩壊後：家族の変容→葬送主体の多様化→葬送の二極分化（「伝統」派／個性派）

＝文献＝

柳田国男 1946『先祖の話』筑摩書房

最上孝敬 1956『詣り墓』古今書院

須藤功 1996『葬式　あの世への民俗』青弓社

田中丸勝彦 2002『さまよえる英霊たち　国のみたま、家のほとけ』柏書房

岩田重則 2006『「お墓」の誕生　死者祭祀の民俗誌』岩波新書

中牧弘允 2006『会社のカミ・ホトケ　経営と宗教の人類学』講談社選書メチエ

碑文谷創 2006『新・お葬式の作法　遺族になるということ』平凡社新書

朽木量＆谷川章雄 2013『シリーズ墓標研究入門１墓石から歴史を読む』（DVD）

柳田國男『葬送習俗語彙』民間伝承の会 1937

## 二一、墓地の種類

墓地の用途は遺骸を埋める事と、以後の祭をする事と、此二つに大別される。今日多くの墓地は是を一つの場所で兼ね備へて居る。然し此第一次墓地と第二次墓地、謂はゞ葬地と祭地とを全然別地と爲す例がある。そして之が古い方式であつた。沖縄等の洗骨の習俗は此二種の墓地の關係を明確に示して呉れる。かゝる第二次の葬式といふことが微かな殘存と化した内地に於ても、然し二種の墓地の關係を究めてゆく資料は未だ相當にある。何れにしろ第一次墓地は短き期間の使用に供せられて居たものであつて、第二次の墓地こそ、本當の我々の墓であつた。

**ムラバカ**　一部落或は其中の數戸で共有地の墓地を所有し、各戸隨意にその適宜の地點を掘つて死體を埋める權利を持つといふ例が全國に極めて多い。肥前西彼杵の江島等では其處を村墓と呼んで居る。そしてそれとは別に寺の近くに寺墓と呼ばれる墓地があり、それは住持の墓から開拓されたものらしいといふから(葬號)、村墓より新しいものである。寺墓には其他良い家の墓が僅かにあるだけだといふ。これも各地でかなり多く見られる村の墓制の一形



## 序

數多い諸國の方言集の中でも、葬禮に關する用語の採錄せられたものは至つて少ない。やはり平生之を口にする者が無いので、かゝつて調べようとする人でないと、知ることが出來ぬのかと思ふ。郡誌の風俗の部には、折々葬列の樣子などを詳しく記したのもあるが、是にもその前後の家々で守つて居る慣例を、注意したものが一向に見當らず、現に所謂兩墓制の如く都市と農村と、新開地と舊來の居住地との間に存する、最も顯著なる制度の差異が、近頃になつて漸く我々の仲間の問題として、考へられ始めたものも多いのである。中代以前にあつてあれほど大切であつた喪屋の生活、火と食物の上に嚴存した忌の拘束、是と各自の經濟的要求との相關、現在は殆ど常識の如くなつて居る墓地點定の個人主義が、行く〳〵此國土を石碑だらけにしてしまはないかどうかの疑問等、一つとして今日明かになつて居る歴史知識といふものは無いのである。それよりももつと根本的なものは、死後に關する我々常人の考へ方、今はこの世に住まぬ國民と、その血を受け繼いで居る活きた人々との連鎖、永い久しい血食といふ東洋思想は、果して變化改廢無しに今も續いて居るか、或は既に凡俗の間にすらも、消えて痕無くならうとして居るのであるか。斯ういふ痛切なる全社會の問題までが、たつた一つの我々の方法によつて、僅かに解答を將來に期し得るのである。故に現在の資料はまだ決して豐富ではないけれども、寧ろ調査者の興味を刺戟せんが爲に、この程度に於て一應の整理を試みる。幸ひなことには他の色々の習俗とちがつて、葬儀はその肝要な部分が甚だしく保守的である。喪家が直接に其事務に當らず、之を近鄰知友に委托する爲に、後者は專ら衆議と先例に依つて、思ひ切つた改定を加へようとしないからである。其結果は村と村との間に著しい仕來りの違ひがあると共に、意外な遠方の土地にも爭ふべからざる一致があつて、或はこの特色によつて、土着の新舊を想察せしめる場合さへあるかと思はれる。西人謂ふ所のフォクロリズム、卽ち進化段階の比較と綜合とが、最も力を施し易い領域であり、この實驗の收穫は必ずしも一個葬送習俗の沿革を明かにするに止まらず、更に他の幾つかの複雜なる問題に應用することも出來るかと思ふ。今回の編輯も前の婚姻語彙のやうに、大間知篤三君が主として其勞に任ぜられたが、是に用ゐられた資料の大部分は、自分の十年以來の集積であつた。曾てこの約五分の一を、宗教研究といふ雜誌に掲載したことがあるが、我々の趣旨と方法とを、尊重する者が少ないので繼續しなかつた。日本の宗教研究なども、斯ういふ國内の事實の認識を、せめては外國學者の所說と同一程度に、重んずるやうになつたらよからうと思ふのだが、其機運を作るだけの力が、私たちの仲間に今まではまだ備はらなかつた。是が永遠の國の學問の姿ではなくて、たゞ單なる一過渡期の狀態に過ぎなかつたことを、やがては立證する日の到來せんことを希ふの他は無いのである。

昭和十二年八月

柳田國男識